

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

北東インドの自然と産業

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 月原, 敏博 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00003708 |

2. 北東インドの自然と産業

北東インドの自然と産業

ここでは、北東インド全体を、アッサム (Assam) という古い呼称をもちいて記述することにする。アッサムとは、狭義ではブラマプトラ (Brahmaputra) 川に沿う河谷平原であるアッサム谷を指す。しかし本稿では、アッサム谷とそれを取り囲む諸山地、すなわち現在のアッサム州と山地諸州を含み込んだ地域全体をアッサム地方と呼ぶことにする。以下、スペイト (Spate), チブ (Chib), 『インペリアル・ガゼッティアー・オブ・インディア (Imperial Gazetteer of India)』などの記述にしたがって、この地方の地理的概況を述べる [SPATE 1972: 600-610; ЧИВ 1984b; Imperial Gazetteer of India 1908: 15-121]。

19世紀の最初の四半世紀には、アッサム谷の多くの地域、とくにアホム (Ahom) 王国の首府であったシブサガル (Sibsagar) 周辺の東部では、絶え間ないビルマ軍の侵入によって事実上人口は減少していた。諸山地はずっと半独立状態にあり、なかには1947年においてさえほとんど統治されていないところも残ることになったが、1824年から26年にかけて、ビルマ戦争の結果としてアッサムは名実共にイギリス統治下に入った。1892年には全人口は5,364,000人にすぎなかったが、1941年には10,204,733人(シレットを含む)にまで増加した。この増加率はインド全体での39パーセントに比べてはるかに高く、90パーセントにものぼっている。バングラデシュ領のシレット (Sylhet) を除外して考えても、1941年から51年の間には20パーセント、1951年から61年には31パーセントの増加を示しており、この最後の時期には連邦直轄領を除いて全人口は11,872,771人であった。アッサム州のみの人口をみても、1971年には14,625,152人、1981年には政治的な事情のために調査は行われていないが、推計で19,896,843人という数字が示されており、人口の増加率は依然として高い。これらの増加のほとんどは、茶園で働くために移住した者や、あるいは、人口稠密な東ベンガルから今世紀にはいつてから不法に移住して住み着いた人々、とくに、現バングラデシュ領内のマイメンシン (Mymensingh) 地方から流入した回教徒たちによるものである。この移動は、とくにシレットとカチャール (Cachar) に影響を及ぼしており、そこでは、1941年において、面積の17パーセント、人口の37パーセントを占めている。しかし、回教徒たちはアッサム谷の諸地方へも流入しており、東部へ行くほど密度は小さくなるが、1921年までに、移住の最先端はシブサガル対岸の北ラキンプール (North Lakhimpur) にまで及んでいる。この移動はまさに開拓移動であり、およそ50万人から100万人の

農民たちが流入した。このマイメンシン地方から来た人たちは、アッサム人よりかなり集約的な耕作を行っているが、彼らはアッサム文化に呑込まれてしまうことを拒絶している。

アッサム地方全体を見たとき、ここでの人口はかなり不均等に分布している。1961年の人口密度は、アッサム谷地区では422.5人であったのに対し、カチャール全体を含む山地諸県は106人のみであり、マニプール (Manipur) は90人、トリプラ (Tripura) は283人、ナガランド (Nagaland) は58人であった。また、山地諸部族の同化問題は社会的、政治的な重要課題である。彼らは極端に散らばって住んでおり、大変多くの言語がある。

アッサム地方の経済についてみれば、農業の拡大に関しては、かなりの可能性がある。また、産業に供せられるような包蔵水力にも富んでいる。戦争は、経済活動を刺激し、交通を改善させ、技術的な知識を拡散させた。しかし、都市化の程度は異常なほどに低く、とくに茶産業を中心とする農業への依存率は、圧倒的である。ただし、石油と茶の利益は主として州境の外に持ち出されている。このような開発は、ほとんどすべて、アウトサイダーであるイギリス人とインド人によってなされてきた。

アッサム地方は、地形の上から5つの地域に分けることができる。アッサム谷、カチャール低地、ビルマ国境山地、シロン高原、アルナチャル・プラデシュである。以下、地域ごとに地理的概況を述べる。

アッサム谷 (Assam Valley)

この地方の中心をなすアッサムあるいはブラマプトラ谷はインドーガンジス・トラフ (Indo-Gangetic trough) の延長であり、標高は数百メートル以下の低平地である。アッサム谷をつくるブラマプトラ川本流は世界でも有数の規模をもつ河川である。チベット高原西部のマナサロワル (Manasarowar) 湖付近に源を持つツァンポ (Tsangpo) 川は、ヒマラヤ北面の氷河から流出する水系を集めてチベット高原を東流したのち、ナムチャバルワ (Namcha Barwa) 峰 (7,757メートル) 付近の大湾曲部、そして急峻なディハン (Dihang) 峡谷を経てアッサムに入り、ディバン (Dibang) 川、ロヒット (Lohit) 川と合流してブラマプトラ川と名を変える。ブラマプトラ川は、アッサムをへたのち、最後はベンガルデルタをへてベンガル湾に注いでいる。ブラマプトラ川には、現在2つの橋がかかっている。ガウハティには鉄道兼用橋が、テズプール (Tezpur) には自動車橋があり、第3の橋として、世界最大の河川島であるマジュリ (Majuli) を横切って、新たな橋が計画されている。アッサム谷は、ドゥブ

(Dhubri) からサディヤ (Sadiya) 上流まで、約650キロメートルにわたる長さを持ち、谷の幅は一様におよそ100キロメートルもある。本流沿いは河道が編目状につながった氾濫原になっているが、アッサム谷の大部分は、本流とその無数の支流のつくった沖積台地 (alluvial terraces) である。本流の流量についてみれば、雪解けと降雨が重なった最大時には、水流は幅8キロメートルを越えるほどの巨大な水の廊下となり、ゴアルパラ (Goalpara) での流量は毎秒14万トンに達する。大型船の航行は、かつてはディブルガル (Dibrugarh) まで可能であったが、1950年のアッサム大地震による河床の上昇とブラマプトラ川が国際河川となったことにより、ディブルガルまでは達していない。

気候については、この地域全体は典型的なモンスーン気候に属するが、夏季の平均気温は29°Cほどであり酷暑期は短い。雨期の長さは年間およそ8か月に及び、このあいだ湿度は85パーセントから94パーセントにのぼる。アッサム谷の南にはシロン高原とそれに続くバレイル (Barail) 山地があるために、アッサム谷南岸に沿っては一種の雨陰効果がみられ、年間降雨量はおよそ1,000ミリメートル程度にすぎない。ただしラキンプール、シブサガルなどの上アッサムでは、南のバレイル山地が標高900メートルに満たない鞍部となっているため、1,750ミリメートル程度に増加する。

地表面積の多くはサラソウジュの森林、低湿地の背の高いアシのジャングル、巨大な氾濫原となっている。

この地域の主要な産業は農業である。『インペリアル・ガゼッティア・オブ・インディア』によれば、かつてのアッサム谷の景観は、ブラマプトラ川本流から両岸にむかって4類型に区分しうる。

「河岸のチャパリ (chapari) は雨期のあいだはひどく氾濫する土地で、背の高い草のジャングルとなっているが、これを焼いて耕した際にはアフ (ahu) と呼ばれる夏稲をよく産する。この播種は3月か4月で、6月か7月に刈り取られる。それにつづいて川が減水する10月か11月にはマスタードやマメ類がまかれ、約3か月後に収穫される。しかし作付けの2年目や3年目には雑草が急速に成長するため、その後8年から10年間は再び放置してジャングルに戻して雑草を根絶させる。

次にチャパリの背後に帯状に横たわる低湿地がある。ここでは茎の長い稲であるバオ (bao) が作付けされる。播種は4月か5月、収穫は11月か12月である。また雨期の増水前に収穫を得ることをねらってアフがバオと混播されることもある。この土地の水はけは悪く、冬作物をつくるには寒冷かつ湿潤すぎる。

さらに河岸から離れ、通常洪水の達しない土地に到ると、移植される冬稲であるサ

リ (sali) が主作物となる。もみは苗代にまかれ、約2か月後の6月か7月に田植えが行なわれる。収穫は11月か12月に行なわれる。サリにはおもにバル (bar) とラヒ (lahi) の2種類がある。バルはラヒより収量は多いが実りは遅く、水も多く必要とするため、低めの土地に植えられている。この地帯は帯状に伸びておりそのはばも広く、恒久耕作地のほとんどと農業人口の大部分はここに集中している。

ここからさらに登って山がちな土地に到ると、標高は上がり、耕地へは山地の水流が引かれて灌漑がなされている。主作物には、サリのほか、カルマ (kharma) と呼ばれるアフの移植型もある。ここでは實際上洪水の心配はなく、灌漑施設によって収穫が確保されている。』[Imperial Gazetteer of India 1908]。

この記述は今世紀初頭のものであるが、現在では、ベンガル人が多数入植している。スペイトによれば、彼らの生活する地域は上の記述にみた人口集中地区より河岸に近い低地であるのに対し、アッサム人が居住する集落は主として河岸台地上、すなわち上の記述にみた人口集中地区にあって、居住環境は明確なコントラストをなしているという。ベンガル人入植者の低地居住は、もともとの居住環境を想起させるものである。

現在のアッサム谷での農作物を概観すると、この地域での重要な作物は、コメ、トウモロコシ、サトウキビ、ジャガイモ、タバコなどである。また商品作物として、ジュートと茶が重要である。ジュートを栽培しているのは主としてベンガル人入植者たちである。アッサム州のジュート生産量は西ベンガル州に次ぎ、とくにゴアルパラ・ディストリクト (Goalpara District) でその生産が盛んである。

茶産業についてみると、アッサム州の茶の生産量は多く、インド全体の生産量の半分以上を占めている。スペイトによれば、茶園はおよそ800か所もあり、一般に平原部や山地の縁の高台に立地している。面積にして162,000ヘクタール以上ある。土着の茶樹がアッサムの北東部で発見されたのは1823年であり、中国貿易での独占状態を失った東インド会社が茶園経営に力をいれたため、この地域で茶園が急速に広まることとなった。この産業は通年必要な熟練労働者はさほどの数を必要としないのに比して、つみとり時には毎年大変な数の労働力(ほとんど女性である)を必要とするが、初期の労働力不足はビハール (Bihar) 州やマドラス (Madras) から半強制的にクーリーを集めることで補われた。近年になっていくらかインド化は行われてきたとはいえ、最大規模の優れた茶園のほとんどは今だにヨーロッパ人のものであり、カルカッタのごく少数の業者によって経営されている。アッサムの人口の12パーセントから15パーセントは茶産業に依存しており、合板工業、石炭工業、人工肥料工業と並んで茶園の継続

的な繁栄は州経済にとって重要である。なおアッサム州の茶園のうち4分の3は、上アッサムのラキンプール・ディストリクト、シブサガル・ディストリクトに集中している。

以上がアッサム谷の農業の概要であるが、それをとりかこむ周辺の山地部での農業は、山地部族によるジュミング (jhuming) と呼ばれる焼畑農耕が主流となっている。

鉱物資源についてみてみれば、アッサム谷の天然資源として最も重要なものは石油、天然ガスである。採掘は、ディグボイ (Digboi)、バダルプール (Badarpur)、ナハールカティヤ (Naharkatiya) などにおいてなされている。これらは埋蔵量も豊かであり、インド国内での産出量のかなりの部分をアッサム州が占めるほどである。石炭については、アッサム産のものは質の上でビハール (Bihar) 産のものに劣るため、マルゲリタ (Margherita) などで行く採掘されているにとどまっている。

アッサム谷に面する傾斜地では、どこであれ良好な地形、気候条件に恵まれ、莫大な包蔵水力を擁している。しかし、実際に開発されているものとしては、ガウハティ (Gauhati) 近郊のウムトゥ・プロジェクト (Umtu Project)、カーシ山地 (Khasi Hills) へ電力を供給するバルパニ (Barpani) ダムなどしかない。

アッサムはインドで最も森林に富んでおり、きめ細かな管理、運営さえなされるならば、かなり有望な資源となる可能性をもっている。サラソウジュの採収は衰えたが、他にも有用な建築用材や、樹脂、なめし液、染料、レース、桐油といった森林産物もある。ゴアルパラにはベニヤ・合板工場があり、ドゥブリー (Dhubri) には大規模なマッチ工場がある。

家内工業として盛んなものとしては、養蚕、絹織物のほか、タケヤトウ (籐) の工芸品づくりなどがある。

都市化についていえば、1971年現在においてアッサム州の全人口の8.9パーセントがいわゆる都市部に住んでおり、この数字はインド各州のうちでも最も低いレベルにある。ディグボイは、油田、炭田の中心として重要である。ガウハティとシロンの二大都市は急速に成長しつつある。この地域の都市成長の特性としては、アッサム谷の長大な長さやその幅の広さによって、特定の中心地のみが成長することにはなっていないことがあげられる。氾濫原には都市の立地に適した場所はほとんど無い。ドゥブリー、ガウハティ、テズプール (Tezpur) は、すべてシロン高原の岩盤の外座層の上にある。他の都市は鉄道の終点か河港となったところにある。

水路は常に非常に重要な役割を演じてきた。かつてはアッサム谷上限のサディヤまで、プラマプトラ川は航行可能であり、鉄道路線が到達するまでは長らく茶の輸送に

使われていた。戦争時の需要に際しては、これらの水路は最初は活発に使われたが急激に廢れることになった。その後、パキスタン分割の後は西ベンガル州との新たな接続が必要となり、また、1950年に大地震があったこともあってこれらの水路網は大きな被害を受けた。

カチャール低地 (Cachar Lowland)

ブラマプトラ水系以外で広大な低地をなすのがこのカチャール低地である。カチャール・ディストリクトはバラク (Barak) 川水系がつくった低地であり、パキスタン分割によってインド領ではなくなったシレットと接している。この地域の年間降雨量は2,500ミリメートルを越える。

この地域の産業の基幹をなすのは低地での米とジュートの生産であるが、丘陵地では茶園や焼畑もみられる。工業面では後進地域である。

『インペリアル・ガゼッティア・オブ・インディア』には、アッサム谷と比較して、シレット、カチャール谷の景観が述べられている。

「カチャールとシレット東部では、大部分の土地は、アッサム谷での広い恒久耕作地の地帯に似ている。主作物はサリとアウスであり、これはそれぞれアッサム谷のサリとアフに対応している。シレット西部は雨期に広大な沼地と化すため、アマン(aman)という茎の長い種類の稲が栽培されている。また乾期にも滞水しているハオル(haor)と呼ばれる窪地では、サイルブラ (sailbura) と呼ばれる冬稲も栽培されている。」

[Imperial Gazetteer of India 1908]

ビルマ国境山地 (Assam-Burma Ranges)

この地域は巨大な弧状山脈であるアラカン (Arakan) 山系からなっている。アラカン山系は密接した山稜と河谷からなり、その幅は大きいところでも250キロメートルほどしかない。この山系は白亜紀と第三紀の砂岩、石灰岩、頁岩からなる。インドービルマ国境に位置するサラムティ山 (Saramati 別名ビクトリア山) は3,800メートルを超えるが、この山稜は一般に2,100メートルを超えない。通常、モンスーンの降雨は最大2,000から2,500ミリメートルに達し、山地部は密林に覆われている。樹相は、湿潤で高度の低い南部での巨大なフタバガキなどからなる熱帯常緑樹林に始まり、モンスーン落葉樹林をへて、最も標高のある稜線ではマツや草地へと変化してゆく。しかし植生は焼畑耕作に大きな影響を受けている。この結果として、濃密な二次林が発生し、アラカン国境ではカインワ竹 (kayinwa bamboo) が濃密に繁茂しているところ

ろが多い。この種の森林は最も通過困難な森林として有名である。

住民についてみると、山地部ではさまざまな部族がモザイク模様をなすように住んでいる。彼らの多くはモンゴロイドであり、最も有力なのはナガ諸族であろう。概して村落はシロン高原のものより定住性が強く、家屋は眺望のきく高みに作られている。これはマラリヤの多い谷を避けるためのほか、防御のためでもある。現在でも村落の多くは柵に囲まれており、ごく近年まで首狩りが行われていた。村落の周りには、耕作中の耕地や破棄された耕地が山脚に沿って延びている。人道は可能な限り山稜を選んでつけられている。空からみると、村落周辺の景観は巨大なアメーバのように見える。つまり、村落が細胞核であり、耕地は偽足である。しかし、南西部のトリプラは、シレットから上がってきているいくつもの並行な河谷によって深く刻まれており、これらは定着農耕、おもに水稻栽培の行なわれる段丘となっている。山地部の住民の生活基盤は、雑穀、トウモロコシ、陸稻、ソバ、タバコ、スイギユウ、ヤギ、ニワトリ、タケ、ワックス、ラックなどで、多くの森林産物がある。

一方この山がちな地域の中で、チンドウィン (Chindwin) 川水系に属するマニプール谷のみは、際だった特徴をもつ山間の盆地である。面積はおよそ400平方キロメートルで、中央部にはアシのはえるロタ (Loktak) 湖がある。標高は約780メートルである。盆地内の土壌は肥沃な粘土やシルトからなり、恒久耕作地では米とトウモロコシが主作物である。ロタ湖をはじめとする湖沼では漁業も行なわれる。

近年になって政府は、セメント、パルプ、などの中小規模の工業開発を進めている。

シロン高原 (Shillong Plateau)

シロン高原はメガラヤ (Meghalaya 雲の住処) としても知られている。メガラヤは、ガロ山地 (Garo Hills) とカーシ・アンド・ジャインティア山地 (Khasi and Jaintia Hills) に分けられているが、これらは単に行政的、あるいは部族的な区分である。シロン高原はインドシナ半島から分離したブロックであって、1,400メートルから1,800メートルの標高をもつ山頂を並べている。北に延びるミキール (Mikir) 山地とレングマ (Rengma) 山地は、それがさらに破碎された外座部である。

シロン高原の南面が、スルマ (Surma) 谷を見おろす急崖となっているのは、世界最多とも言われるほどの多量の降水を受けているためである。この急崖は、16キロメートルから20キロメートルのうちに1,500メートル以上の勾配を見せるほどである。高原の東部はバレイル山地に続き、さらに、地質構造上極端に複雑な標高900メートル以下の低い鞍部をへてビルマ国境山地へと続いている。

シロン高原の多くは密林に覆われている。標高の高い稜線部にはマツがあるが、それ以外のところでは何世紀にもわたる移動耕作によって森林と二次林が交錯している。これらの場所にはシャクナゲとランが多い。またそのほか開けた草地 (downland) もいくらか存在している。

ガロ (Garo), カーシ (Khasi), ジャインティア (Jaintia) といった部族は、焼畑農耕によって生活しており、村落はジウム (jhum) と呼ばれる耕地と一緒にしばしば移動する。ジャガイモとオレンジが主な商品作物であり、コメ、トウモロコシはランタナ (lantana) の低木を長時間焼いたあとの灰の中に植えられる。このほかの作物としては、雑穀、ジュズダマ (ハトムギ)、イモ類、綿花、ビンロウ、ベテル、キャッサバ、カシューナッツなどがある。

アルナチャル・プラデシュ (Arunachal Pradesh)

ヒマラヤの最東辺は近年に至るまでよく知られてはおらず、その政治的な帰属問題は中印間の論争課題となっている。この地域はかつて北東辺境地方 (North-East Frontier Agency or Tract) という行政区をなしていた。現在、アルナチャル・プラデシュは、独立州として認められ、10のディストリクトからなっており、全体の面積は83,578平方キロメートルである。人口は、1961年、71年、81年の各センサスにおいて、それぞれ336,558人、467,511人、631,839人と記録されている。

ツァンボ川はディハン峡谷にてヒマラヤを深く刻んで横切ったのち、ブラマプトラ川と名を変えているが、ナムチャバルワ峰と激しいディハン峡谷の向こうには、サルウィン川 (怒江)、メコン川 (瀾滄江)、金沙江 (長江) が並行して北西方向より流れている。ブラマプトラ川支流のロヒット川は、もとイラワジ川水系に属していたと言われている。

この地域はシロン高原と並んで多雨地帯であり、年間4,000ミリを越える降水量が記録されている。人口の集中しているのは、カメン・ディストリクト (Kameng District) やスバンシリ・ディストリクトの比較的降雨量の少ない河谷である。

この地域の気候は高度にしたがって南北へとおおよそ3分して考えることができる。南の山麓に沿った地帯は温暖な亜熱帯気候に属する。ヒマラヤの内部は比較的冷涼な気候に属し、標高の高い大ヒマラヤでは高山気候がみられる。土壌や植生もこれらに対応して変化している。

1981年現在でも労働人口の約8割は農業に従事しており、ジウムと呼ばれる焼畑は、耕地面積の半分以上を占めている。森林は二次林となっており、ところも多い。ごく一

部には、棚田などの恒久耕作地も存在する。重要な作物は、コメ、オオムギ、トウモロコシ、雑穀、コムギ、ダイズ、トウガラシなどである。住民の生活様式にはさまざまな違いがある。西部には、複雑な階段耕作を行い、頑丈な家に住んでいる仏教徒であるモンパ (Monpa) 族がいる。東方には、かつて悪名高かったシャン (Siang) のアボル (Abor) 族が住んでいる。現在彼らはアディ (Adi) 族と呼ばれている。その北部にはタギン (Tagin) 族などのグループが住んでいる。

(月原敏博)